

さういふわけで私は、漢字といふものが、たとひ子供たちにとってどんなにむづかしいものであらうとも、出来るだけ早く学習させ身につけさせてやらなければならない、とかう考へまして、学習に適する時期を知るためにもいろいろと実験を試みたわけであります。その一つが、「社会で一般に漢字を用ひて表記してゐる言葉は絶対にカナ書きしない」といふ方針で幼児を指導したことでした。

従来、カナを学んでから漢字を学ぶといふやり方をしてゐたのでありますが、私は、カナよりも先に漢字を学習させたわけであります。すると驚いたことに、子供たちは、実にスラスラと漢字を覚えるのであります。しかもこれは実験を続けていくうちに判^{わか}ったことですが、従来むづかしいと思はれてゐた漢字ほど覚えやすい。例へば、「鳩^{はと}」といふ字がございます。この字は、「九」といふ字と「鳥」といふ字で出来てゐます。従来の考へ方では、「九」のやうな漢字は字形が簡単だからやさしい漢字だと考へられ、これは一年生でも学習できるといふので、文部省では「九」を一年生の学ぶ漢字と指定して居ります。「鳥」といふ字は、それより字形が複雑だといふので、一年生ではむづかしいと考へられ、二年生以後に^{まは}廻されてゐます。「鳩」のやうな漢字は、最もむづかしいもの

であると考へられてゐて、現在では、高校にならないとこの字を学習しません。

ところが、就学前の子供たち、ことに文字を全く知らない子供に、この三つの漢字を読んでやってみてください。「これ、ハトといふ字よ」「これはトリといふ字よ」「これはココノツといふ字よ」この程度です。これだけの学習で、次の日^{ため}試してみますと、子供が読めるのは「鳩」で、その次が「鳥」。「九」はほとんど読めません。三歳の子供で覚えられるのは、「鳩」だけで、「九」のやうな漢字は、「鳩」の十倍、二十倍の時間をかけても覚えてくれません。かういふことは実験してみない限り、どなたにも気づくことではないと思ひます。

文部省では「九」「鳥」「鳩」といふ順序に学ばせてゐます。これは常識的にはだれも異論のないところでせうが、実は、「鳩」「鳥」「九」といふ順序に学ばせなければいけないのです。この方がはるかに能率的であることが、実験の結果^{わか}判ったのです。

この事は、認識の過程といふものを考へてみれば、よくそのわけが理解できます。「鳩」といふものは、実在する、最も具体的な、しかも幼児のよく理解してゐる、幼児のよく親しんでゐる実在を直接表した文字

であります。子供たちは、鳩そのものを理解するのと同じやうに、「鳩」といふ字形に対して、これが鳩なんだと、直感的にこれを頭の中に入れてしまふものであります。この学習には、幼児は何の努力も、何の負担も何の苦勞も感ぜずに、たちまち、わづか一、二秒の時間でこれを記憶してしまひます。同様にして、「鶏」「鶴」「鷹^{たか}」……まあ鷹などといふ字は幼児の実際の生活には出て参りませんでせうが、かういふ実在を直接表現してゐる漢字はすぐ覚えてしまひます。

そして、鳩、鶏、鶴、鷹……といふ実在を通じて、「鳥」といふ概念を理解させるのが、これが理解を進めていくための当然の手順であります。「鳥」といふ言葉は、鳩、鶴などの実在から抽象したところの概念を表した言葉であります。従って、鳩、鶴などをまづ学習し、その後に「鳥」の学習に移るのが、学習の手順としては当然の順序であります。そして、「鳥」が解り、「虫」が解り、「魚」も解るといふやうに、いろいろな抽象概念が解って初めて、次にそれらを数として把握^{はあく}する能力が生れて来るのであります。従って「九」のやうな抽象度の高い文字から先に子供たちに提出するといふ事は、学習の手順としては逆であり、誤つてゐると言はなければなりません。

かういふ事が、十数年にわたる実験によって初めて判^{わか}った訳^{わけ}ですが、とかく私どもおとながむづかしいと思つてゐるものが子供にはやさしくて、おとながやさしいと考へてゐるものがかへつてむづかしい、かういふ事が確かにあるものであります。

カナ文字といふものは、漢字に比べて、内容といふものがございません。内容のない、ただ抽象的な音声だけを表した文字であります。かういふ抽象的なものは、具体的な内容を持つ漢字を、少なくとも五十字か百字くらゐ学習させ、理解したあとでなければ、理解しがたいものであります。まづ漢字を学習し、その理解を経てからカナの学習に進ませますと、カナの学習も極めて容易になります。従来^{従来}のやうに、最初からカナを学習させることは、子供にとっては大変に困難な学習なのです。私どもは、明治以来、カナは易^{やさ}しいといふ先入観がありますので、だれもがカナから先に学んで参りました。従って、私どもはさういふものだと思つてゐましたから、カナの学習に特別の困難を感じてゐなかつたのであります。実はこれがとんでもない間違ひだつたわけでありませぬ。

実験してみればすぐ判ります。三歳の子供でしたら、カナはほとんど

覚えられません。しかし、漢字でしたら、先に述べましたやうに、幼児の知ってゐる具体物を表した漢字でしたら、三歳の子供で覚えられないものはありません。知能のよほど遅れた子供でも、覚えられないものはほとんどありません。

従来、漢字はカナよりもむづかしいと考へられてゐましたので、特殊学級では漢字はむづかしい、カナでなければ学習できないものと考えられてゐました。ところが、神戸の大橋中学校の特殊学級で、辻昌子といふ先生が、私の著書を読まれて、特殊学級の子供たちに、今までのカナに換へて漢字をどんどん教へました。すると、とたんに子供たちの目の輝きが違って来た、といふ報告をしてゐます。つまり、抽象的な音声文字は、精神薄弱児のやうな知能の低い子供には理解しにくい、従つて覚えにくい文字なのであります。精薄せいはくの子供こそ、漢字を大いに与へられなければならない子供だったので。そこで、漢字といふ理解しやすい文字を与へられた子供たちは、初めて文字を学ぶことの楽しさを知り、学習することの楽しさを知り、その目が生き生きとして来た、とかういふわけであります。